

タイトル： 洋上救急の記（5 木の葉のように

ぐらーぐらーと、これほどの大船が木の葉のように大波に弄ばれる。海の頂からクレーターの底まで沈み落ちてはまたせりあがる、これが永遠に繰り返された。

ベッドに伏しても眠れもしない、眠りたい！逃れたい！この苦しみから。眠れば救われる！シャツのボタンを腹まで外し、ベルトも外し、チャックも降ろす。なんとか眠りたい。

やっと、23時頃までろんだ。ところが午前1時頃、事務的なノックの音で地獄の現実に戻された。ノックの主は世話係さんではなく、立派な制服姿の隊員さんであった。足元で靴をパシッと鳴らしさっと敬礼をすると、姿勢を崩さず早口で

「現在最速で現地に向かっていますが、到着は午前5時頃になる予定です。ただし、その時点で現地がシケてヘリが飛べないようでしたら、また対策を立て直し再度ご報告にあがります。お休みのところ失礼いたしました」

と言いその場でくるりと回転すると、にわかに部屋を出ていきそうになった。

僕は起き上がる力もなく、みっともない姿を掛けシーツで隠しながら

「すみません、あのヘリが飛べないときは... ボートなどに乗り移るのですか？」

なにせ初体験なのである。

こんな状態でタグボートか何かに乗り移ったり、相手の船の梯子を登ったりできるのだろうか？そこが不安の種だったのだが、この問いかけは彼の耳には届かなかった。

やっと睡魔に包まれたところだったのに... また苦しい時間を無為に過ごすことになった。

次にあの隊員さんが現れたのは、再びまどろみ始めた午前5時頃のことだった。

「間もなく現地に到着しますが、天候不順のためヘリが飛べない状況です。八島（第二管区の旗艦巡視艇）はすでに4人を確保しており、救助を待っていますが、こちらへの収容ができない状況です。八島と伴走して関東圏（第三管区内）に戻り、低気圧の影響から十分離れた海上でヘリを飛ばすこととなりました。したがって先生、今少し出番をお待ちください」

僕は独りつぶやく。

（今さあ、用が無いなら何もこんな5時に報告に来なくてもよかろうなもんじゃない？）

こうしてまた覚醒させられた「船酔いムード一杯」の部屋でひとり、今聞いた状況をおさらいするまじめな俺であった。

思考力が朦朧としている、考えたことが口に出てしまう。

（・・・けどさあ、金華山って宮城県なんでしょう？第二管区の領域で、しかもその巡視艇が収容しているんだから、仙台という大都市があるじゃない！本拠地の港に戻ったほうが速いんじゃない

いの？仙台なら三次救命救急病院だってあるでしょ。なぜ第三管区に？？どうしても手渡したいわけ・・・？)

このあたりになると、船酔い医者は医師としての本分を失っている！船酔いは恐ろしい。

やがて、朝の刺すような強い陽ざしが丸窓に差し込んできた。どうやら低気圧からは逃れつつあるらしい。

が、海のシケ状態はちっとも変わらない。

朝8時、僕の世話係さんが様子を見に来てくれた。

「朝食はたべたくないでしょうねえ...」

僕は、力なく手を左右に振って（No thank you）を伝えた。

その後、やっと少し眠れたようだった。

昼ごろ「キャプテンからお話したいことがある」ということで、キャビンに上がってくるよう指示を受けた。

（容赦ねえなあ〜）とつぶやきながら俺は起き上がった。

あの長い階段を、身なりを整えながら昇ってゆく。出航のときと何も変わらない、颯爽としたキャプテンがにこやかな笑顔で迎えてくれた。キャビンは輝かしい陽の光に満ちていた。

（まぶしい）

「いやあ、先生にはだいぶきつい思いをさせたようです、申し訳ありませんでした」

「いえ、こちらこそ情けないザマをお見せして申し訳ないです。まだ何も仕事をしていません」

「あと5時間もすると房総沖まで戻れます。波が小さくなったところで、ヘリで八島に飛んでいただきます。そこでヘリに患者を収容します。先生、あとひと息ですから、5時間ほどまたお休みください」

なるほど、医師の出番は今夜になるわけだ。思えば病院を出てただただ24時間、船酔いつぶれの憂き目に遭っただけだ。嘔気を止めながらまた階段を降りて自室に戻り、ベッドに身を投げ込んだ。

5時間後、この俺は役にたつのだろうか？

つ・づ・く